

美術科教育学会通信 NO.33

1999年6月1日発行

学会事務局 〒640-8510 和歌山市栄谷930 和歌山大学教育学部 美術教育学研究室

TEL : 0734-57-7359,7358 (長谷川・永守研直通) FAX : 0734-57-7509,7508 (同)

通信担当 〒630-8528 奈良市高畑町 奈良教育大学 TEL&FAX : 0742-27-9223 (宇田研直通)

新年度のスタートにあたって - 盛会の福島大会、夏の「リサーチ・フォーラム'99」 -

代表理事 花篤 實 (大阪芸術大学)

第21回の学会が、福島大学で盛会のうちに終了されましたことを心からお慶び申し上げますとともに、運営で大変ご苦労戴きました当番大学の関係者の皆様方に、この紙面を借りまして厚く御礼申し上げます。

今回は、最近の教育改革を視野に入れた教育学との接点をもった様々な企画で、福島大学の教育現場への積極的なアプローチの姿勢を伺わせて戴き、内容の濃い大会になったと感謝しています。また、個人発表者も院生発表が目立って、若々しい熱気が会場に満ち、院生の研究者養成を主眼として出発した本学会の原点の一つを改めて認識させられました。この蓄積が、今後の学会開催に生かされること

を願っております。

他の学会でも共通に見られる現象のようですが、本学会も会員出席がこの数年約半数に固定されてきました。会員の機能も多様化されて来ているのも確かですが、年一回の学会開催ですので、会員諸氏の奮ってのご参加を願う次第です。

さて、本学会も遅ればせながら組織的な整備を図り、事務局運営の中で、情報と研究の交流を手がけたいと模索しています。その一環で、通信や学会誌の増量化、データステーションによる活性化を何とか軌道にのせたいと努力していますが、それに加え、昨年まで宮脇理前代表理事の企画で進められていた「出前シンポ」(全20回)に代り得る夏季集会「リサーチ・フォーラム」を、とりあえずスタート・具体化いたしました。

この企画は、福島大会での役員会で承認され、実施は事務局に委任された形でいきました。具体案は、事務局の担当方から、後の頁で詳しく紹介されていますので御覧戴きますが、ミニ学会的な性格と会員研修的な性格を併せもったもの



鈴木寛男・大勝恵一郎両先生への美術科教育学会特別表彰 (1999.3.28 学会総会)

です。ともすれば形式的になりがちな学会発表ですが、これに対して「リサーチ・フォーラム」では、斯学が現時点にて直面している課題を一つ選び、それに関連した小テーマについて、企画側が指名した何人かの会員の発表を、時間をかけて会員相互の徹底した討議で進めていきます。そこには、学会として質を保持したいという願いが込められています。

ここ数年いろいろなところで目立ってきたアノミー（社会規範の崩壊）現象に関わって、美術教育の方法論でも“ディスプリン（規範性）”の問題が一つの論点になってきました。特に論争の当事者を抱える本学会も避けて通れない課題であると思いますし、その意味でも今回の第1回のフォーラムのテーマとして相応しいと思います。是非多くの会員の参集をお待ちしております。

アカデミズムとジャーナリズムの二極化や知識の情報化など、知識の市場化が避けられなくなっている今、研究者は相互のコミュニケーションと厳しい相互批判による高い知的緊張感をもって、今後新しい学的空間を構成していく事を期待して止みません。

第21回 美術科教育学会 福島大会を終えて

三浦浩喜（福島大学）

あの美術科教育学会で冬に逆戻りしたかに見えた陽気も、順調に回復しすっかり初夏の陽気となりました。

学会終了後、故佐久間敬教授と故白沢菊夫教授の墓前に大会の大成功を報告いたしました。ふと、御両名が本学美術科のあり方をめぐって、酒宴のたびに論争されていたことを思い出しました。「本学美術科を全国に通用するものに高めるために大いに外に送り出すべき」という白沢教授に対し、「まずは足元を固めることが大事、県内の美術教育を振興してゆく」という佐久間先生の熱弁。今回の美術科教育学会の構想にあたっては、御両名の論を折衷させたかたちで運営させていただきましたが、天国のお

二人はどう思っておられるでしょうか。

さて、私のやり方で福島大会を締めくくらせていただきます。

第21回美術科教育学会福島大会の最後にあたり、四つの拍手を贈ります。

まず一つ目の拍手は、リレートーク、記念講演で貴重な問題提起をいただいた中西新太郎、佐藤広和、長田謙一、宮崎清孝各先生に贈ります。中西先生はプレ学会に引き続いて鋭い角度で若者と表現の関係に切り込んでくださいました。はるばる三重からおいでになった佐藤広和先生は、近年活発になりつつあるフレネ研究の足場を本学会に築いてくださいました。長田謙一先生は、本学理事であるにもかかわらず、大胆なそして勇氣ある問題提起をしてくださりました。宮崎清孝先生は、アフオーダンスの概念を美術教育に提起され、新しい時代の幕開けを予兆させてくださいました。

二つ目の拍手は、福島大会を縁の下から支えてくださったスタッフのみなさんに贈ります。自分の研究時間を犠牲にして大会のために力を尽くしてくれた院生のみなさん、「これがうちの学生か！」と思えるほど、こまめに、そして力強く働いてくれた学生のみなさん、突然の依頼を快く引き受けてくださった研究発表の司会の先生方、そして新時代を拓こうと努力される発表者の方々、お酒も飲まずに懇親会を盛り上げてくださった司会のお二人、そしてここまでご助言をいただいた花篤實先生をはじめとした理事の皆様にも心より感謝いたします。

三つ目の拍手は、去って今なお本学美術科を支えてくださっている宮脇理先生、大橋皓也先生、故佐久間敬先生、故白沢菊夫先生に捧げます。度重なる不幸に見まわれ、絶望の淵にいた私たち現地会員を常に励まし続け、物理的にも精神的にも大きな支えとなってくださいました。大会をつくってゆく中で「何でこんなことやらなくちゃいけないんだ」「もうダメだ……」と思ったことは、一度や二度ではありません。その度ごとに先達の顔や声に叱咤激励されました。この大事業をやったのけて、わが美術科はよみがえり、パワーアップしました。

最後に、四つ目の拍手は、第21回美術科教

育学会福島大会に参加して下さったすべてのみなさんに捧げます。会員参加者162名、一般・学生・県内参加者74名、学生スタッフも入れれば、当初の目標である250名を軽く越えることができました。本当にありがとうございました。年々厳しい状況に追いやられる美術教育の世界ですが、学会の中で肌を感じることができた信頼の絆は、時代を変える可能性を秘めたものであると確信いたしました。ともにがんばりましょう。そして、2000年、兵庫の地に集いましょう！

「リサーチ・フォーラム'99」 - 美術科教育学会課題研究会 -

課題

美術教育における“ディスプリン(規範性)”
「美術の論理」と「子どもの論理」

日時 1999年8月27日(金)午前10時～
午後4時

場所 ペンてる本社ビル14階会議室
東京都中央区日本橋小網町7-2
(地下鉄東西線又は日比谷線茅場(かやば)
町駅下車新大橋通を北に徒歩約10分)

入場無料(非-学会員の方も参加可能です。)

課題発表者及び内容

1. 美術の一般的方法論をベースとした“規範性”(仮題) 金子一夫(茨城大)
 2. 現代美術(70年代以降)をベースとした“規範性”(仮題) 那賀貞彦(大阪教育大)
 3. 子どもの活動をベースにした“規範性”(仮題) 水島尚喜(聖心女子大学)
- スーパー・バイザー: 宮脇 理(元筑波大)
コーディネーター: 新井哲夫(群馬大)
宇田秀士(奈良教育大)

時程

午前10時～12時30分 / 上記3氏の発表・
質疑応答

午後1時30分～4時 / 午前中の補足討議、全
体討議

問合せ先 宇田

通信1頁目タイトル下の住所、TEL・FAX

又はE-mail: udah@nara-edu.ac.jp

課題設定の理由

コーディネーター 宇田秀士(奈良教育大学)

この課題は、雑誌『美育文化』を中心に展開された、いわゆる「金子/柴田論争」を基礎においたものです。この「論争」においては、当事者のお二人の論議を中心にして、美術教育に身をおく様々な立場から、戦後美術教育の評価、教育の主体性、芸術における知的側面、新学習指導要領の解釈などの問題についての意見提示がなされました。

この「論争」の一つのポイントは、昨今の教育改革論議のあり方が、必ずしも“健全”とは言えないことを、改めて示したことにありと考えています。現状のそれは、文部省の「口あたりのよい」スローガン提示とその生かし方だけに終始しており、本質的な論議は、はなから避けられてしまっている観があるからです。

これは、文部行政のみに問題があるというよりも、それを受け入れる側の現場教師の意識や管理職の職務内容の変化、そして本質的な議論形成をすべき本学会の研究に対する取り組み方にも一因があると思われる。

いずれにせよ、「上意下達式」そのものとも言えるこの構図の下では、教師たちの自主的・自律的な活動は育たず、それこそその文部省の意図にも反するものと言えるのではないのでしょうか。

今回の『美育文化』の企画は、こうした流れに一石を投じたという意味で価値を有すると思われませんが、ジャーナリクに見栄えのする対立軸の設定だけでは、限界があるのもまた事実です。自らの主張とは、離れたところで無理に対立点を見いだし、真意が伝わらない面も生じつつあるからです。

こうしたことから、この問題に対して、学会としての独自のアプローチがあると考えました。それは、十分な主張・発表の時間をとりながら、たっぴりと討議するという形式です。こうした方式は、今回この通信とともに会員諸

氏に届けられた『学会二〇年史』の初期の研究
会時代の状況描写にあるように、本学会の原点
とも言えましょう。

さて、課題(テーマ)にある“ディスプリン(規
範性)”の中心をどこにおくのかという観点か
ら、3人の発表者を設定しました。

上記の「論争」を基礎におきながらも学会と
しての味付けから、人選をいたしました。や
はりトップ・バッターとして、金子一夫氏に登
場いただきました。この課題を長年研究し、「世
紀末の時代のムード」に勝負を挑んだ氏の主張
「美術の一般的方法論をベースとした“規範性”」
をここで、確実に押さえる必要があるからです。
近代美術(古典的リアリズム)に関する主張が
クローズ・アップされていますが、それを含め
た美術の一般的方法論を提案いただきます。

かつて、山本鼎の主張が反対者に対する反論
としてあったにもかかわらず、誤って解釈され
現在に伝えられているという氏の研究成果があ
りますが、氏そのものの言説もやや誤解を生じ
ているようです。ここで、発言の真意を確認し
たいと思います。

また、続いて発表いただく那賀貞彦氏も、20
年来、エッセンシャリストを自認されて美術教
育論をまとめてこられました。氏の論にある
(60年代の現代美術に立脚する「造形遊び」とは
異なる地平をもつ、という)70年代以降の現代
美術に立脚した美術教育(マニエリスム教育)
の“規範性”について語っていただきます。

統合化理論、表現科構想ではカバーできない
という「美術の表現と認識」についての氏の構
想は、ある種のストラテジーとしても読みとる
ことができそうです。

最後に「子どもの活動をベースにした“規範
性”」について、水島尚喜氏にお願いいたしま
した。90年代のキーワードとも言える「学級崩壊」
「学校崩壊」は、子ども自身並びに子どもを取り
巻く環境(大人、地域社会、社会規範)の劇的な
変化によっていると思われる。こうした時代
においては、良きにつけ悪きにつけ「子ども文化」
が、美術のもつパワーを凌駕している現象が起
きているのかもしれない。そういった子供につい

ての考察を教育実践をからめて語っておられる氏
には、少し無理をお願いしました。

子どもの立場からの主張の場合、“規範性”な
どという言葉自体が、邪魔になることもあるか
らです。ここでは、「~に基礎をおく」「~を中
心とした」といった位の広義に捉えていただ
き、自由度を持って語っていただきます。

午前中の発表をふまえて、午後の討議を行
います。ここでは、フロアーからの意見も取り上
げ、考えていきたいと思えます。

なお、発表者の題目については、当日多少の
変更があるかもしれないことを予めお断りして
おきます。この通信で広報できるように、でき
るだけは詰めましたが、まだまだフォーラムの
全体構造が明確ではありません。スタッフ及び
発表者の間での話し合いを続け、8月までにも
う少し詰めたいと考えています。

多数の参加、ご意見をお持ちしております。

情報担当からのお知らせ

上山 浩(三重大学)

学会誌バックナンバー寄付のお礼

学会通信前号にて、学情センターの電子図書
館への学会誌バックナンバー収録に関しまし
て、寄贈のお願いをいたしました。

おかげさまで多くの方々から、お申し出をい
ただき、すべてを揃えることができました。

具体的には、2,5,6号は神戸大学の東山氏から、
3,4,7,8号は筑波大学の岡崎氏から、11,12号は東
京学芸大学の柴田氏から、それぞれ寄贈をいた
だきました。また、その他に、サクラクレパスの西
村氏、愛知教育大学のふじえ氏、群馬大学の新井
氏より、寄贈可能な旨の連絡を頂きました。

本当にありがとうございました。この場をかり
まして御礼申し上げます。

上記のバックナンバーは、すでに学情セン
ターに送付いたしました。近いうちに学情セン
ターの方でデータ化され、電子図書館に公開さ
れるものと思います。

懸案になっています学会誌バックナンバーの

CD-ROM化は、学情センターからデータを入力し次第始める予定です。学情センターから入手できるデータはTIFFタグという画像データです。これを検索しやすく加工するノウハウをこれから開発する必要があります。しばらくご猶予下さい。

庶務担当よりのお知らせ

永守基樹（和歌山大学）

1. 新入会員のご紹介

去る3月26日、福島大学にて開かれた役員会において、以下の方々が発員として承認されました。（順序は入会申込受け付け順です。）

渋谷 清（福山市立女子短期大学）

武田雅行（山口芸術短期大学生生活芸術科）

本田悟郎（千葉大学院生）

内藤ちなつ（千葉大学学生）

柳 芝英（横浜国大院生）

伊藤 順（上越教育大院生）

結城孝雄（鳴門教育大院生）

布目雄一郎（玉村町立玉村中学校）

渋谷吉昭（社会福祉法人徳島県心身障害者
福祉会おおぎ青葉学園）

張 東浩（筑波大学院生）

長島春美（上越教育大学修士課程院生 / 東京
都教育委員会）

金田義彦（岩手県立遠野高等学校情報ビジ
ネス校）

井手典子（武雄市立武雄中学校）

浅賀由美子（小山市立小山第三中学校）

木村康夫（福島県立光南高等学校）

相馬ひとみ（宇都宮大学院生）

佐野仁美（奈良教育大学院生）

村上一馬（宇都宮大学院生）

鈴木 司（秋田公立美術工芸短期大学）

丸岡哲也（秋田公立美術工芸短期大学）

北沢茂夫（いわき短期大学）

林 蘭心（愛知教育大学院生）

王 冰（愛知教育大学院生）

梅原才子（高知市立三里小学校）

2. 口頭発表者の入会手続きに関する申し合わせの変更について

福島大会学会総会において、入会に関する手続きの申し合わせについて、以下のように変更することが承認されました。

（旧）口頭発表を希望する者は、遅くとも夏の役員会において会員としての承認を受けなければならない。

（新）口頭発表を希望する者は、遅くとも当該年度の12月末日までに入会申込書を学会事務局まで送付しなければならない。

口頭発表をするためには会員でなければなりません。口頭発表希望者が既に入会しているか否かの確認に関して大会事務局が混乱することを予防するための措置です。新しい申し合わせでは、12月末までの入会申込者を翌年1～2月に開かれる総務会において仮承認することになります。尚、12月末は既に当該大会（翌年の3月）の発表申込が締め切られている時期ですので、この申し合わせは以降厳格に適用することになります。

3. 会員名簿について（住所や勤務先等が変わった方は「変更届」をお出し下さい。）

今年3月に3年ぶりに会員名簿をお届けすることができました。本来ならば会員諸氏に変更事項の問い合わせをした上で発刊すべきであったかも知れませんが、今回は時間的にも予算的にも余裕がないことから不完全なものを出さざるを得ませんでした。申し訳なく思っております。

今後、会員情報については、事務局の方でもできる限り把握・管理していきたいと考えています。会員名簿に添付いたしました「会員情報変更届」をご活用いただき、変更のある方は早急にご連絡頂きますようお願い申し上げます。また将来の学会MLの構築なども視野に入れてE-mailのアドレスもご連絡頂ければ幸いです。

その他、不備の点多々あるかと思いません。お気づきの点があればご教示下さい。

学会誌『美術教育学』第21号 (2000年3月刊行予定)論文 投稿に関するお知らせ

学会誌編集委員長 柴田和豊

周知のとおり本学会では、学会誌論文の投稿を常時受け付けていますが、この度、上記第21号(2000年3月刊行予定)掲載論文の投稿締め切り及び諸条件事項を決定しましたので通知いたします。尚、諸事項についての微細な指定は、編集者の過重負担と刊行経費を軽減する為とご理解下さい。万が一、条件違反があった場合、高い確率で、今回の査読には間に合わず、次号(22号[2001年3月])の編集にまわさざるを得なくなります。ご承知おき下さい。

送付物

査読用原稿を4部(プリントアウトされたもの、すべて複写でも可)形式は、1頁43字×36行(1,548字表題・注釈等を含む)横書き、1段組となります。1頁目は、表題(副題を含む)、英文題、氏名に9行を用い、10行目から見だし、本文と続けて下さい。詳しくは、学会誌20号を参照して下さい。(今回送付していただくのは、論文掲載の可否を決するための査読用原稿となります。最終的な刷り上がりはB5判となりますが、この段階ではA4判で提出して下さい。また、図表等は、必要ありませんが、査読の上で重要と思われる場合は、投稿者の判断で原稿内にレイアウトするか末尾に添付して下さい(4部とも。))

論文査読結果返信用封筒(A4判用[角形2号])、270円切手貼付、返信用(投稿者の)宛先を明記して下さい。

論文受領確認用葉書(50円官製葉書、返信用[投稿者の]宛先を明記して下さい。)

緊急連絡(査読結果に応じて必要)用連絡先のメモ(A5判[A4半切]横位置横書きにして、氏名、電話番号[自宅・職場の別を明記]その他にFax番号や携帯電話番号、E-mailアドレスなど連絡を取りやすいアクセス方法を明記して下さい。)

送付法

〆切：本年8月5日(木)まで必着

宛先：〒184-8501 小金井市貫井北町4-1-1
東京学芸大学 美術科教育研究室
柴田和豊

方法：郵送に限ります(手渡や宅急便も不可)備考

投稿料につきまして、規定の頁数を10頁とし(10頁以内の投稿料は25,000円)、それ以上の頁数は超過の投稿料(1頁あたり5,000円)を頂く予定としています。

査読後掲載が決定した場合、以下(詳細は、掲載決定後、該当者に通知します)を送付いただきます。これらを準備いただけない場合、掲載可を取り消さざるを得ない場合がありますので、あらかじめご準備おき下さい。

- ・論文編集委員会からの指示に応じて加筆修正した原稿に図表等の位置をレイアウトしたもの(指定のメモ書きを含む)。
- ・上記原稿の文字(数字も含む)部分のみを、MS-DOSフォーマットされた3.5インチフロッピーディスクにテキストファイル形式で保存したコンピュータファイル。(注：従来はワープロ専用機で作られた機種に依存する専用ファイルも受け付けていましたが、今回から、MS-DOSテキストファイルに一本化されました。投稿者個々の責任にて何らかの方法でMS-DOSテキストファイルに変換することをお願いします。)
- ・英文要約(100-150words、原則としてnative speakerのチェックを受ける必要があります。)
- ・日本語要約(英文要約の日本語訳：今回から日英の要約は対応させる必要があります。)
- ・日英キーワード
- ・データベース用ファイル

照会先

[原稿内容について] 柴田和豊

TEL:0423-29-7608 FAX:29-7599(共同)

E-mail:kshibata@u-gakugei.ac.jp

[技術・形式全般] 上山 浩(三重大学)

TEL/FAX:059-231-9280

E-mail:ueyama@edu.mie-u.ac.jp

研究部会報告

「工作工芸領域部会」報告

上越教育大学 西村俊夫

工作工芸領域部会は1995年秋に発足し、現在会員数約30名で『部会通信』の発行を中心とした活動を行っている。部会通信は1996年3月1日に第1号を発行した。現在は、1999年2月に第5号を発行し、5月に第6号を発行する予定である。第5号、第6号の内容は以下の通りである。

【第5号】(1999年2月1日発行、A4サイズ8ページ)

- ・小論文「<方法・行為>としての染め」(上越教育大学 佐藤賢司)
- ・レポート「和紙づくりの現場から」(平村和紙工芸研究館 黒澤償)
- ・小論文「明治初期、フェノロサの5つの講演における工芸の扱いについての一考察」(島根大学大学院 三宅摩利)

【第6号】(1999年5月発行予定、A4サイズ10ページ)

- ・小論文『教科書』の“カルダー” - モビールのためのノート - (山形大学 河野令二)
- ・インタビュー「工芸 - 近代的なるものをめぐって - 民芸、モダンデザイン、そして近代とファシズムのアポリア」(千葉大学 長田謙一、聞き手佐藤賢司)

工作・工芸領域部会は、教育全体の変革の時期にあって様々な角度からの問い直しと再構築が迫られている美術教育の現状において、工作・工芸教育の中心となるものづくりの教育がそれを進めて行く際の大きな鍵になると考えて発足した。「工作・工芸領域部会」という名称からは従来の工作教育や工芸教育の継承をイメージする方がいるかもしれないが、基本的にこの部会は、新たな視点で工作・工芸の問題を総合的に考えることを念頭において

いる。したがって、学校教育とは直接関係しないところでの工芸の理論や制作の論理について考えることも積極的に行うつもりであり、また関連する他の領域との交流も考えている。

最近、周知のように、明治以降の近代日本美術の見直しが盛んに行われている。北澤憲昭氏は、絵画や彫刻を包含していた近世までの「工業」は<機械>と<精神>の二極へと分裂し、「美術」と新たな「工業」へと再編されたが、「工芸」はどちらの極にも属し得ず、境に疎外されるかたちとなった。しかし、現在、この「工芸」こそが新たな芸術の地平を開く可能性を持つと指摘する。「足下の大地が音もなく流砂となって流れ出しそうな不安に充ちたこの静かな滅びの時代に、造形の可能性を問う戦略的拠点として『工芸』はある」(北澤憲昭「アヴァンギャルド以後の工芸」)。こうした視点は言うまでもなく美術教育の領域においても重要である。「近代」の再検証は今後の美術教育を模索する上で不可避であり、また私たちは先に述べたように「工作・工芸」が美術教育の可能性を問う拠点であると考えている。

工作工芸領域部会は上記のように、部会通信『工作工芸』の発行を中心とした活動を行ってきたが、その方向は基本的に維持してゆく方針である。ただし、今後はそれに加えて、研究会を開催するなどの活動も併せて行うつもりである。現在、会費等は徴収していない。基本的に自由参加である。多くの方の入会を希望する。

尚、部会事務局及び部会通信の編集部は現在、上越教育大学工芸担当教官の西村俊夫、高石次郎、佐藤賢司が努めている。当面はこの体制を維持して行くつもりだが、会員数が増加し、活動の発展性に展望が見られた時点で他の場所に移転することも考えている。

【連絡先】

工作工芸領域部会事務局
〒943-8512 上越市山屋敷町1
上越教育大学芸術系教育講座(美術)
西村俊夫
TEL&FAX 0255-21-3536
E-mail:nisimura@juen.ac.jp

研究ノート/実践報告

『近代日本美術教育の研究 明治・大正時代』中央公論美術出版，平成11年4月

金子一夫（茨城大学）

このたび『近代日本美術教育の研究 明治・大正時代』（中央公論美術出版、平成11年4月）を『同 明治時代』（平成4年）の続編として刊行することができた。文部省科学研究費出版助成金を得ての出版であったため、文部省納入用本2冊を2月末日に完成させ、一般市販用を4月1日付で発行した。同時に前著の『同 明治時代』も復刊した。

B5正寸判（週刊誌大）で510頁の執筆及び編集作業はややきつかった。同判型で794頁あった前著に比べれば分量は少ないし、その経験もあるので楽になってよいはずであったが、何しろ勤務の忙しさが七年前と格段に違って、年を重ねればいろいろな役目も廻ってくるし、このところの組織改革続きで頭が飽和状態に近かったためである。『学会二年史』の編集作業もあったが、大部分の原稿が夏休み前後に集まったので、この影響はあまりなかったと言ってよい。いずれにせよ、無事刊行できてほっとしている。

大きな内容構成は以下の通りである。

序説 美術教育史研究の方法論

第一部 明治時代

序章

第一章 英国美術教育史と日本の選択

第二章 工部美術学校における絵画・彫刻教育

第三章 明治期図画教育と人物

第四章 国民美術の形成と専門及び普通美術教育の諸問題

第五章 明治時代 結論

第二部 大正時代

序章

第一章 山本鼎の思想形成
第二章 自由画運動の発生と展開
第三章 山本鼎の美術教育理念とその反対者
第四章 山本鼎の美術教育方法論
第五章 自由画運動の周囲
第六章 昭和期の山本鼎
第七章 大正時代後期 山本鼎と自由画運動
結論

今回の主な研究方法論は、次のようになる。明治時代の美術教育については、それをとりまく大きな時間的・空間的な関係、すなわち江戸時代及び英国美術教育史との関係を捉えようとした。その結果、江戸期階級社会から明治期国民国家への転換に対応して、階級毎の美術を一つの国民美術へ転換形成することが美術教育の課題になったこと、しかも西洋の学校美術教育制度を参考にしながらも風景（山水）を重視した絵画的図画教育を推進するといった日本独特の選択があったことを示した。この江戸時代及び西洋と明治時代美術教育との連続と断絶という観点から見てみると、明治時代の美術教育が何をやるようとしたのかわかるような気がした。

大正時代に関しては、山本鼎と自由画運動を中心に検討した。特に山本鼎の言説を明治後期の思想形成時から昭和初期まで丁寧に見た。その結果、明治後期に山本鼎が版画の自立性を主張した背景には、実用としての木口木版が写真製版に替わられていく状況があったこと、山本の西洋留学前から自由画論の原形があったことを示した。さらに山本鼎のリアリズムが対象の発する生命力の把握であったこと、「自由画の要点」が論争の文章であったこと、大正11年以降の山本鼎が堅実な美術教育方法論を構想・実践していたこと、「血気の仕事」はよく言われる「自由画教育運動打ち切り宣言」ではないこと等を示した。中でも「血気の仕事」の解釈については、研究者の方々に話題にして欲しい点である。

約二十年前、研究生生活を始めた頃の論文を原形とした箇所がある。今回の編集作業中に、当時は見えなかった、歴史的事象の意味に気づいたことがあった。やはり研究作業の継続と蓄積は必要であると感じた次第である。

書評&文献紹介

ジョン・デューイ(市村尚久 訳)『学校と社会・子どもとカリキュラム』講談社学術文庫, 1998

ふじえ みつる(愛知教育大学)

デューイ(Dewey)の『学校と社会(School and Society)』の初版が刊行されたのは、ちょうど今から百年前の1899年であった。宮原誠一氏訳の岩波文庫で読まれてきたが、市村氏による新訳が刊行されたので再読してみた。その底本は、1990年にシカゴ大学から刊行された。編者は、ジャクソン(Philip W. Jackson)で、かつてDBAEをめぐる、アイズナー(E.W. Eisner)と論争した人物であることを思いだした。

今私が本書に注目したのは三つの理由からである。第一は、米国における大学附属学校が一般に「実験学校(Laboratory School)」と称する背景を知りたかったこと。それは「心理学的原理を教育実践に結びつけるという、実験的応用の側面を取り扱う意味」であり、シカゴ大学附属「実験学校」化がその底流にあったと編者は述べている。第二は教員養成という観点からである。当時のシカゴと現在の日本とでは大学制度や社会状況が異なるので、簡単に比較はできないが、デューイによれば、当時の師範学校はハイスクールとカレッジの中間の変則的な位置(anamolous position)にあるという。デューイは「総じてこれまでの師範学校の目的は何を教えるべきかということよりも、いかに教えるべきかということを訓練することにあった」が、カレッジでは「何を教えるべきかについては学んでいるが、そのための教授の方法はほとんど軽蔑されてる」と嘆いている。

さて第三の理由は、第2次大戦の敗戦のあと、日本に導入されたいわゆる 進歩主義教育の源流とその後のわが国における展開とのズレが

気になったからである。そのズレに注目する視点は「総合的な学習の時間」の来し方と行く末を見通すための視点になりうるだろうと思う。市原氏も「訳者あとがき」で、デューイの提唱した経験の再構成論が「個のなかに全体をみる」という命題に立つ限り「子どもの生活経験は、伝統文化や教科と対立するものではなく、両者の理論的主張を統合する論理として」、特に「小学校での生活科および小・中学校の総合学習...子どもの学習が主体的になされることを保障する方法的原理を示唆してくれる」ことへの期待を表明している。確かに、本書で紹介されているいくつかの実践例は、敗戦直後の「社会科」や今日の総合的学習の理論や実践と類似した側面をもっている。しかし、それを、どう結びつけるかは読者次第であろう。

最後に、特に美術教育という観点からみて興味のある部分を紹介しよう。デューイは、「子どもはすべて、形と色という媒介を通して、自己を表現することが好きである」として子どもが樹木を描写する作例を挙げ、樹木の観察と想像的思考とが結びついて「詩的な感じをもつ」と同時に「実際にありそうな樹木になっていて、たんなるシンボルでなくなっている」点を評価している。その描写は、表現主義的というより印象派的な作例である。さらにデューイは、学校で利用できる子どもの衝動(instinct)を、社会的な本能(言語、コミュニケーション)、構成的な本能(ものをつくりたい、ごっこ遊び等)、探究する本能(会話と構成的衝動の結合から、何かをやってみてその結果を見届けたい)、表現的(expressive)本能(コミュニケーションと構成的衝動との結合)、またはその洗練された芸術本能(art instinct)の四つを挙げている。

その他、本書には「子どもとカリキュラム」(1902)という論文も収録されている。そこでは、教科と子どもの経験とのあいだには「ギャップがあるという偏向した観念」が批判され、両者がともに事実や真実であるという点の共通性を求めていくことが主張されている。教科と総合学習との関係を考える上で示唆に富む論文である。

ペーパーバックの原書も千円台で入手できる。一読をお勧めする。

Mail Box

このコーナーでは、会員の方々からの便りを掲載します。学会や美術教育に関するご意見等をお寄せください。

大学院修士課程の 折り返し点で

山口拓也 (横浜国大院 / 藤沢市立湘洋中学校)

以前私が美術の授業を受け持ったことのある〇さんが母校で教育実習をすることになり、再び私が指導教諭になるという偶然がありました。これだけでも珍しいことなのですが、偶然はそれだけではありませんでした。その年、〇さんと私はそろって同じ大学院の美術科の入試を受けることになったのです。お互いにそれを知ったのは実習の打ち合わせのときのこと。日程がちょうど重なっていたため、実習の予定表は大学院入試の二日間、空欄となりました(実習期間中二日もそろって姿を消した指導教諭と実習生を当時の同僚は何と思ったことでしょう)。教え子と一緒に受けることになり、「これで落ちたらかっこ悪いなあ」と思いつつも、彼女の成長した姿をうれしく感じながらの受験でもありました。

私が、藤沢市の中学校の現場から修士課程への派遣として横浜国立大学の院へ出させていただいてから瞬く間に一年が経ってしまいました(〇さんも合格しましたが、教員としての採用が決まり、残念ながら「同級生」になることはできませんでした)。この間、それまでの勉強不足を痛感し何もできずに時間ばかりが過ぎていってしまったように感じる一方で、毎日が新しい世界との出会いの連続でもありました。

現場でのここ何年かは、生徒指導担当としての仕事や「開かれた学校」をテーマとする校内研究など学ぶところのたいへん多い日常生活でした。しかしその一方で、学級担任の仕事

から離れ生徒との親密な人間関係をもつ機会が減る中で何か空疎なものを感じ、勤務して十数年が経過して進む先が見えないような閉塞感にとらわれてもいました。雑多の仕事に追われ、本来最も力を入れなくてはならないはずの教科の授業を後回しにする状況の中、美術という教科の本質に思いを致すことなど及びないことで、絵画・彫刻・デザイン・工芸をルーティンワークのごとくに消化するといった日々でした。

このような時期に現場を離れて美術教育について見つめなおし、勉強する機会を得られたことは幸甚です。一年前のことを思い返すと、自分自身の考えやものの見方がずいぶんと変わったと改めて感じます(もちろんこれから先の一年間でもさらに変わっていくはずですが)。

そこで、この場をお借りし、自らの勉強の中締めも兼ねて、中学校の美術教育に関する今の思いを若干述べさせていただきたいと思います。

教育改革がさげられる昨今ですが、社会と教育が遊離し、あたかも教育の主体が子どもであるように言われる状況。学びの主体は子どもですが、教育の主体は大人あるいは社会を含めた総体といえるでしょう。を問いなおし、確固たる教育理念をもって、学校教育の意義を十年後二十年後の社会を見据えつつ現代のコンテクストの中で問いなおしてみる必要があるのではないのでしょうか。ここで意識しておきたいことは、中学生は今を生きる中学生であると同時に、十年二十年、さらにその先を大人として生きる存在でもあるということです。このように当然のことを改めて確認しておくのは、教育を考えるときに、今目の前にいる「子ども」という存在のみを注視することになれば、発達段階の中での位置づけや、教育の真の目的を見失うことになりかねないと思うからです。ここでは、中学校での教育における「個性尊重」の真の意味も改めて問わねばなりません。

最近、「学級崩壊」という言葉をしばしば耳にします。この言葉の内容はさておくとして、集団が「崩壊」するとき、個性も意味を失うのではないのでしょうか。崩壊した集団にあっては個性は単なる我儘・勝手気儘でしかなくなって

しまうのだと思います。

集団が崩壊した状態というのは、互いに期待をしなくなってしまった状態とみてはどうでしょうか。自分以外の人間に期待することがなければ集団は意味をもちません。逆に言えば、互いに期待することが多くある状態では集団は非常に重要な役割を担うと同時に、その場における各人は個性的な存在であるはずで、互いへの期待を回復することが真に個性を尊重する人を育成することになるものと私は考えます。

このような状況の中で美術科はいかにあるべきなのでしょう、何ができるのでしょうか。各教科が時間数の削減を余儀なくされる中で、美術科もその厳しい洗礼を受けている現在、今後を考えると安閑としてはいられない思いが募ります。しかし、だからこそ美術教育に携わる私たちが、「美術は必要」という前提とは異なる方向から教科の在り方の根本を見つめなおし、その上で美術教育の意義を訴えることをしなければ、美術教育に関心のない一般の人々の理解を得ることは難しいことだと思います。現在、私はコミュニケーションを視点の中心に据えて中学校の美術教育のありかたを考えています。

美術の授業で制作に取り組んでいるとき、多くの生徒は目を輝かせて没頭しています。そして、そのようにして生まれた個性あふれる作品は、きっと各にとって愛着の深いものでしょう。こういった活動の重要性は今後も失われることはないでしょうし、失われてはならないことだと思います。

しかし、義務教育の中に位置づけられた必修教科として美術の授業というのはそれだけでいいものなのでしょうか。これだけでは、自分しか見えない、他人を見ることができない人間が育ってしまうことに多少なりとも荷担してしまうことになるのではないかという懸念を拭い去ることができません。さらに言えば、辛いことがあってはじめて真の喜びの価値がわかるように、自分を見るということと他人を見るということとは表裏一体であり、他人を見ることができないということは延いては自分を見ることすらもできないということの意味するのではないのでしょうか。

自らの制作に思い入れをもつと同様に、他人のそれをも尊重し意味を考えていくという姿勢を育むことの重要性が見えてくるように思います。繰り返すことになりませんが、「個性」や「多様化」は「集団」とともに考えられてはじめて生命を持つのであって、個性と他者を理解することとは切り離すことができない関係にあるといえ、このことからコミュニケーションという視点が導かれます。自分勝手な表現の押し付けや、好みや情動だけで取捨を決めてしまうような姿勢は再考を迫られることになりましょう。自分にとっては明らかなことも、他者にとっては必ずしもそうでないということは重要なところではあります。

美術で扱うことになるのは主に広い意味での画像(イメージ)の世界ですが、その特性として十人いれば十様の解釈が成り立ち得ます。「十人十色」を「個性」といってしまうのはたやすいことですが、今まで述べてきたような観点からすれば、そこで終わるべきではありません。コミュニケーションというからには、一般的なあるいは基本的な共通の解釈を追求することももちろん必要なことではあるのですが、さらに重要なのは、自分なりの解釈を自分や周囲の人間にとって、より有用なものとして共有する姿勢や力が培われることだと思います。(無論、これはイメージの世界を感性で受け止める力と同時に培われるべきであり、互いに補完し合うものといえます。)

そしてそれは、今の時代に溢れる雑多な情報に流されることなく、自ら立ち止まって考えることのできる自省力・批判力をもった人を育てることでありましょう。真に自律的な人を育成することが、他者そして自分自身への期待を再生することにつながるものであり、美術教育はイメージの世界を通してそのことにおおいに資するものでもあるはずで、

残りの一年間で、様々な方のご指導をいただきながらこういった考えをさらに深め、なんとか形にしたいものと思っています。

1999・InSEA 世界会議ブリス ベン大会（オーストラリア） へのお誘い

仲瀬律久（聖徳大学）

国際美術教育学会（InSEA）の世界会議は、これまで世界各地で3年毎に開催されてきましたが、いよいよ今世紀最後を飾る記念大会が、1999年9月21日（火）～26日（日）に、オーストラリアのブリスベン市で「Cultures and Transitions」をテーマに開催されます。

テーマについて

21世紀に向けて世界的に急速に展開する多様な文化の複雑性を認識することが主題です。副テーマは1996年の優れたユネスコ報告書に明らかにされた教育目標である Learning:The Treasure Within に応えたものです。それは、learning to know, learning to do, learning to live together, and learning to be という4柱からなっています。

【問合わせ】大会事務局

E-mail: mail@enterprisingevents.au

世界会議日程

9月18日（土）～19日（日）= 評議会、事前観察、観光等

20日（月）～21日（火）= リサーチ・カンファレンス（研究発表会）

21日（火）= 開会式、レセプション

22日（木）～25日（土）= 基調講演、研究発表、研修会、教材展示、作品展示ほか

26日（日）= 閉会式

27日（月）= 事後観察、観光等

世界会議の参加資格には、InSEA 会員とすることが必要です。（ただし、研究発表以外は、開会式当日の申し込みも可能です。）

会員登録の方法

InSEAの新規あるいは継続会員になるには、同封の申し込み用紙に必要事項を記入して、自身でオランダの事務局に郵送してください。米ドルと換金したり小切手での送金方法もありますが、マスターカード等の番号を申し込み用紙に記入するだけで、申込者の銀行からの自動引き落としになります。

参加申し込みの方法

大会参加希望者で個人あるいは団体ツアーを希望なさる方は、至急下記の旅行業者に、連絡ください。必要書類をお送りします。

（株）ツアープランナー・オブ・ジャパン 聖徳大学内営業所（〒271-8555 松戸市岩瀬550）
TEL: 047-360-5911 内線3527

FAX: 047-360-5912

又は、本社内支店（〒110-0005 東京都台東区上野3-2-1 フジオビル4F）

TEL: 03-3835-4111（代）

FAX: 03-3835-4285（担当者）近江かおり
問合せ先

その他、本件に関わる事柄は、下記までお問い合わせください。

英文の大会申込書（Registration Form）をお送りします。

* 仲瀬律久（理事）

TEL: 03 - 3311-3866

FAX: 03-3311-1978

E-mail: nori.nakase@nifty.ne.jp

学会通信No.33をお届けします。3月の学会報告、各担当からのお知らせ、8月開催予定のリサーチ・フォーラムの案内、そして企画頁等、盛りだくさんの内容になりました。お忙しい中原稿をお寄せいただいた方々に感謝いたします。

花篤代表理事や宇田理事の記事に記されているように、学会の新たな試みが「リサーチ・フォーラム」という形で始動しようとしています。創立後21年目を迎えた学会

が、新しいステージに足を踏み入れつつあることを感じさせます。美術科教育をめぐる環境が益々厳しさを増している今日、「リ

サーチ・フォーラム'99」において、美術科教育の核心を突く活発な議論が展開されることを期待したいと思います。

次号No.34の発行は9月を予定しています。各コーナーへの投稿及び情報コーナーへの情報提供をお願いします。（新井）

編集後記